

〈研究ノート〉

## 「ファスト風土化」に抗する観光教育の意義

—ライフデザイン教育を視野に入れて—

中島 智

コロナ禍を経たいま、観光は、国づくりやまちづくりの一つの鍵となるだけではなく、観光や地域に関わる人々に創造的な生き方を示唆する教育とも関連性が深いことは見落としてはならない重要な視点である。とくに「ファスト風土化」現象が顕著な日本社会では、文化の享受能力と関連した観光教育が期待される。本稿は、観光の公共的役割に着目し、持続可能な観光の視点に基づいて、観光学の先行研究や関連領域を参照しつつ、地域に根ざした観光教育の意義を提起している。

キーワード：観光の公共的役割、持続可能な観光、ファスト風土化、観光教育の意義、地域に根ざした観光教育

### はじめに

2020年に起きた新型コロナパンデミックは国内外の人々の往來を著しく制限し、観光産業にも未曾有の打撃を与えたことは言うまでもない。観光は、国づくりやまちづくりの実現に果たす役割が期待されてきたが、観光やその舞台となる地域に関わる人々に創造的な生き方を示唆する教育ともつながりが深いことは見落としてはならない重要な視点である。

本稿では、観光の公共的役割に着目し、学際的かつ実践的の学問とされる観光学が蓄積してきた、文化や社会とリンクした人間の「生」へのまなざしを観光教育に反映させていくための手がかりを得ることを目的としたい。

まず本論に入る前に、ここでの観光の公共的役割の意味とそこから導かれる観光教育の視座を近年の観光政策をめぐる動向の中に位置づけておきたい。

2015年に国連総会で採択された「持続可能な開発目標（SDGs）」において、観光には直接的または間接的に17すべての目標に貢献する潜在力があることが指摘され、2017年は「持続可能な

観光国際年（International Year of Sustainable Tourism for Development）」と定められた。

一方、国内では観光立国政策が展開され、少子高齢化や人口減少に直面する中で、国主導の「地方創生」が進み、成長戦略の柱として観光を位置づけてきた。そこでは、観光におけるマネジメントの重要性が強調されるようになり、観光教育の場においても観光の質的变化に対応した専門的職業教育や地域づくりと連携した人材育成が要求されてきた。

しかしながら、現下の観光の衰退から抜け出すためには、「持続可能な観光」とは何かをあらためて考える必要がある。本来の意味での持続可能な観光は、地域の自律や観光産業のイノベーションだけではなく、旅行者の意識改革を具現化することで可能となるはずである。

観光を経済社会文化トータルな現象として捉えた場合、観光教育の課題は専門的人材育成や労働スキルの形成などの供給（ホスト）側だけでなく、需要（ゲスト）側の文化資本の形成であることを指摘したのは遠藤竜馬である。彼は、比較的若い世代における大卒層と高卒層、また

は相対的高学歴層と相対的低学歴層との間の観光消費行動の格差の存在を指摘したうえで、職業的人材育成だけでなく、より良き観光客を生み出す教育が重要であることを主張している<sup>1)</sup>。

こうした文化の享受能力の育成と関連した観光教育の必要性については議論が進みつつある<sup>2)</sup>が、最近ではコロナ禍を受けた観光のあり方そのものの見直しの議論と相まって、言及されるようになってきた<sup>3)</sup>。

観光教育の意義をめぐる筆者の問題関心もこのあたりにあるが、さらに、地域社会における固有の文化の喪失とそれがもたらす人間発達や社会連帯の危機を示しておきたい。

要するに、生活の近代化、さらにはグローバル化に伴う文化の画一化傾向をどう受け止められるか、という問題であり、風土のマクドナルド化すなわち「ファスト風土化」の問題である。地域の固有性や多様性に依拠する観光交流やそれを促す観光教育は、「ファスト風土化」からの回復あるいは地域の再生に貢献することができるのではないだろうか。筆者の問題関心はそこにある。

## 1. ファスト風土化する日本社会

戦後の日本社会では、高度経済成長によって向都離村が進み、また核家族化の進展や少子高齢化、生活様式の変化がそれまでの地縁や血縁に基づく関係性の濃厚な共同体を希薄化させてきた。すなわち、共同性が希薄な地域社会が広がっていった。特に、高度消費社会の進展は経済合理性を追求しつつ、生活の都市化を推し進め、高い利便性と快適性を実現したが、それは、同時に他方で、地域における人々の紐帯や自然との関わりに危機的な状況を招来したことも否めない。

1970年代後半には「地方の時代」が叫ばれた

こともあったが、その地方都市こそそれから現在に至るまで、急激な都市化・郊外化に見舞われた地域である。

地方都市の抱えるさまざまな社会病理を「ファスト風土化」として抉出してみせたのは三浦展である<sup>4)</sup>。その主張を筆者なりに端的に要約すると、次の二点にまとめられる。一つはグローバル化の時代を迎え、生活様式や価値観の均質化が進展したことで、地域固有の生活文化が消滅しつつあることである。もう一つはコミュニティが崩壊し、代わって均質な消費文化が蔓延したことで、異質な人間同士の出会いや交流を失った地方の子どもや若者が人間的な発達や生きる意欲を阻害されていることである。

このような生活空間の郊外化は、その地域の個性を無視し、そこで暮らす子どもや若者の個性を発達させる機会を剥奪するものである。つまり、二重の意味で「没個性化」が進展しているというのが、「ファスト風土化」に対する筆者の理解である。

いまや、地方に対する牧歌的なイメージは幻想であり、市場原理の導入によって効率優先となり無駄が許容できなくなっている地方都市の文化的状況を、平田オリザは次のように活写する。

本屋で立ち読みをしていると、普段無口な店主が近づいてきて、「お前もそろそろいい歳なんだから、ツルゲーネフでも読めよ」と勧め。「次はドストエフスキーか」と先回りして、売れるあてのない岩波文庫を仕入れておいてくれる。書店や古本屋だけではない。街の写真館が、ジャズ喫茶が、ライブハウスが、画廊が、地域の文化の重層性を支えてきたのではあるまいか。それら地域の文化を下支えしてきた小さな空間が、根こそぎなくなっていく<sup>5)</sup>。

さらに地方では、地域経済の活性化に向けた観光振興が盛んにおこなわれているが、もしそれがそうした政策目標に沿う特定の文化実践の特権化につながるとすれば、地域文化の本来有する多様性を捨象し、人々の生きがいにかかわる市民の文化活動を後退させてしまうだろう。あるいは地域活性化政策は、皮肉なことに、地域固有の景観を破壊することもある。都市景観は、その都市の歴史文化の表象であるから、それを破壊する行為は、そこで暮らしてきた人々の記憶を忘却することに他ならない。

そのような「ファスト風土」で暮らす若者たちの生活様式ならびに文化行動には地元志向がみられるとされる。自分の周囲の「島宇宙<sup>6)</sup>」の論理に沿った行動をとることが彼らの特徴であり、一般的にいえば、多様な地域・旅行先への関心はあまり高くないと考えられる。また、若者たちの地理感覚の欠如もしばしば指摘されるところであるが、ある意味ではこれも、彼らが没個性・没場所化した地域で育ってきたがゆえの当然の帰結とみなせよう。

オギュスタン・ベルクは、前出の三浦との対談<sup>7)</sup>のなかで、「近代の世界観においては、自然環境でも共通の技術システムでも、自分の外部に存在する客体として捉え」ており、「各個人は、それに頼っていることを無視して、自分が自由に使えるもの、選択できるもののようにふるまってい」と述べたのち、次のような指摘をする。

しかし、本当は逆なんです。昔の人間よりずっとシステムに頼っている。システムがなければ、何もできない。だんだん、より社会的に束縛された状態になっている。これは近代的な世界観の行きづまり、矛盾なんです<sup>8)</sup>。

近代的な世界観の矛盾は、そのまま「ファスト風土化」した地方都市の矛盾といいかえてもよいだろう。それは、すなわち、グローバル資本主義的な文脈における地域の経済的豊かさの追求が、それと裏腹に、その地域の文化的貧困をもたらすという地域経済と地域文化の矛盾である。それでは、こうした矛盾、あるいは相克を克服するためには、どのような視点が必要になるだろうか。

まず思い起こすべきはコミュニティの再生である。急激な経済成長の結果として引き起こされた公害問題の解決や生活環境の改善を出発点に、おおむね1960年代半ば以降、まちづくりが展開されてきたことは周知のとおりである。そのテーマや領域は次第に広がっていったが、本稿が扱う観光分野に関しても例外ではなく、町並み保全運動や地域おこし、農村都市交流から今日の観光まちづくりに至るオルタナティブな観光交流の動きは見逃せないものがある。

このように、日本の地方都市では、一方では「ファスト風土化」現象が進行してきたが、他方ではまちづくりに代表されるコミュニティの再生の動きもみることができる。後者に関連した観光分野のオルタナティブな動きには、地域の伝統文化や生活文化の再生へ向けての潮流が含まれていることに目を向ける必要があるだろう。

## 2. 地域文化再生への動きと現代観光論

屋上屋を架すかもしれないが、地方都市の「ファスト風土化」が進行し、それがもたらす社会病理が懸念されているのが現状である。

こうした「ファスト風土化」に対するオルタナティブな動きを捉える概念の一つに「内発的発展」論がある。それは地域固有の風土や伝統を尊重し、地域住民が主体となって創出される

社会発展のあり方を指す。欧米社会の発展経路を普遍的とみなす近代化論に対し、多系的な発展経路を視座に据えた理論として1970年代中頃から注目されるようになった。日本では社会学者の鶴見和子が提唱したことで知られるが、1980年代には経済学者の宮本憲一が政策論的な視点から地域の内発的発展を論じ、今日にも大きな影響を与えていることは言うまでもない<sup>9)</sup>。

鶴見和子は、民俗学者の赤坂憲雄との対談のなかで、内発的発展論は教育学であるとし、「社会学よりも教育学なんです。社会学でいえば、社会化の理論。というのは、その人間のひとりひとりの可能性を実現、顕在化していく、伸ばしていく。それが教育です<sup>10)</sup>」と述べている。

東北学の提唱者としても知られる赤坂憲雄が実践し、その意義を強調する地域学、あるいは地元学などの地域教育の試みもまた、地域の内発的発展に向けての潮流に位置づけられよう。彼は、かつて地域に生存のモラルとして存在した民衆レベルの相互扶助に注目し、次のように述べている。

これからの時代の自治とか、もやいと、相互扶助とか、そういうものを国家に委ねるのではなくて、地域の側があらためて伝統的な知恵とか、文化とか、民俗とかいうものを素材にしながらつくっていくことが求められている<sup>11)</sup>。

さらに、筆者なりに敷衍していえば、伝統的な生活文化やそれを紡いできたコミュニティに学ぼうとする感性は大切であるが、しかしそれらをそのままの形で過剰に礼賛してはならないと考える。むしろ、地域の文化やコミュニティを、現代という時代の中でどのように再構築していくのかを考える知性こそ磨く必要があるの

ではないか。

赤坂はまた、この点を次のようにも指摘している。

これまでのアイデンティティというのは、どこかひとつの中心に向けて収斂していく形でしかつくられなかった。けれども、われわれのこの時代というのは、多様性を抱えこんだ形で、開かれたアイデンティティは可能なかという問いかけを必要としているんじゃないか。それは内発的発展論でいえば、外と内との交流、そしてキーパーソンを仲立ちとして内と外がさまざまな交流をするというイメージで語られていますけれども、とりわけわれわれ自身が内発的に、自分をひらいていくというときの手がかりとして文化的な多様性、あるいは内なる他者をきちんと認知していく。そうしてそこに、新しいもやいをつくっていくことができるかというテーマが浮上してくる<sup>12)</sup>。

このように、交流というものが、自己形成や社会形成に積極的な意味をもつとすれば、現代の社会現象としての観光は、看過できないはずである。

複雑で多面的な社会現象である観光を、ホストとゲストの相互作用として把握したのはヴァレーン・L・スミスである。彼女は1970年代後半に、観光が地域社会に与えるインパクトを文化人類学の方法で読み解いた観光人類学の先駆的著作<sup>13)</sup>を編集したことで知られているが、1990年代にはマストツーリズムに対するオルタナティブな概念として、「オルタナティブツーリズム」を提起している<sup>14)</sup>。

日本でみられる郊外化によって風土性が希薄化した地方都市が、自らの風土を見つめ直し、伝

統やコミュニティを再構築していく動きは、外部資本の導入による観光開発に対するオルタナティブな動きにおのずとつながっていくことになる。では、このような動きはどのように理論的に説明されるのだろうか。

石森秀三は、日本における内発的発展論の系譜を踏まえつつ「内発的観光開発」の概念を提起し、「地域社会の人々や集団が固有の自然環境や文化遺産を持続的に活用することによって、地域主導による自律的な観光のあり方を創出する営み」の重要性を説明している<sup>15)</sup>。

石森によれば、内発的観光開発の「最も重要な前提条件は、『自律性』である」という<sup>16)</sup>。そして、「『内発的』という言葉は閉鎖的な意味合いを喚起するが、一つの地域社会が潜在的に有している各種の可能性が発現される契機はほとんどの場合に外部の諸要素との出会いにもとづいている」と指摘したうえで、内発的観光開発は、「地域社会の側がみずからの意志や判断で外部の諸要素を取り込んだり、それらとの連携を図ることによってよりよい成果を生み出す試みとみなすべきである」としている<sup>17)</sup>。このような指摘は、内発的観光開発においては、地域外部の主体との交流や連携がきわめて重要な要件となることを示すものと考えられる。

そうした交流や連携による地域づくりと関連・融合した観光の研究や教育をめぐる問題を理論的に分析したのが、橋本和也である。彼は、現代アートを活用した地域芸術祭の事例に触発され、地域文化やそれに深く関係する地域性は地域に所与のものとして存在するのではなく、「地域の人々が発見・創造し、育てあげたもの」とであると把握し、それを発信する「地域文化観光」の概念を提起している<sup>18)</sup>。

こうした観点に立って、「観光人材育成の理論構築において求められていることは、地域目線

での観光を『制作』することによって新たな価値観が『制作』される過程を観察し、世界が新たな仕方で意味づけられ、一過性のマスツーリズムではなく、地域の人・モノとの『交流』を通していかに新たなネットワークが構築されるかを考察することである」と橋本はいう<sup>19)</sup>。さらに、観光教育の現場では、「観光庁のいうビジネスマネジメント的教育」も必要であるが、地域では、「大衆観光的利益追求に対抗しうる、『地域文化』に根ざした地域の人々にとっての新たな観光のあり方を志向する人材の育成が求められている」と指摘している<sup>20)</sup>。

これらの現代観光に関する優れた研究は、地域文化の再生ないしは創造に寄与するオルタナティブな観光の実現が地域社会の自律性の支援にかかっていることを示すものであると同時に、その方向での教育の必要性をも示唆している。すなわち、地域に根ざした観光教育である。

### 3. 地域に根ざした観光教育への示唆

いま求められている地域に根ざした観光教育は、いったいどのように地域文化にアプローチすればよいのだろうか。

そもそも地域文化とは、その地域の風土を構成ないしは表現するものであり、人間と自然／人間と人間の関係性の総体として、また、価値観の体系として捉えることができよう。一般に、文化的事象は近代的な科学の方法論となじまないとする考え方もあるかもしれないが、普遍的真理を追究するのではなくても、地域固有の価値や人と自然・社会の関係性を追求して、風土の持続可能性を追求する知的営みを学問と呼ぶことは許されるであろう。

経済一辺倒の戦後日本社会にあって、開発志向の地域振興や人間疎外からの決別を求めて、上述したような関係性の学問に取り組み、次世

代の育成を進めた先駆者は少なくない。そこで、その代表的学者にして野外科学を提唱・実践した川喜田二郎と、日本中を旅した民俗学者で観光教育の草分けの一人ともいべき宮本常一、さらに日本民俗学をはじめとする人文知を手がかりに観光学を捉え直す作業を進めている井口貢の思想に注目し、地域に根ざした観光教育がもつ今日的意義に迫ってみたい。

文化人類学者の川喜田二郎（1920-2009年）は現代社会の根本問題を次の三つの公害に見た。

三つの公害とは、ひとつはいわゆる公害。すなわち環境が汚染され、あるいは破壊されるという形で、社会と環境とが調和しなくなってきたという問題。もうひとつは、人の心が荒廃していくという公害で、この状況も人間が作り出した、いわば精神公害と呼ぶべきもの。第三のものは組織公害で、組織のなかで人間が人間らしさを失うとか、組織の運用が柔軟にできなくなるという欠陥の問題である<sup>21)</sup>。

こうした状況に対峙し、情報の多様性の調和を図るためには、総合的な科学的方法が必要であるが、デカルトの物心二元論に淵源をもつとされる西欧近代型の科学には推論・分析の方法しかない。そこで実践的に提起されたのが、野外科学ならびにKJ法という創造的問題解決の思想であり、技法であった。

川喜田は、創造的問題解決の過程を「一仕事やっつけてのける」とか「一仕事する」という言葉で表現し、「ひとつの問題を初めから終わりまで解決し達成すること」の重要性を強調している<sup>22)</sup>。また、創造的行為の三カ条として、第一条「自発性」、第二条「モデルのなさ」、第三条「切実性」ということを挙げ、「この三カ条をで

きるだけ高度に持っている『ひと仕事』ほど、それは創造的な行為である」という<sup>23)</sup>。

彼によれば、創造的な行為による達成体験が累積した場所は、当事者にとって「ふるさと」となるという<sup>24)</sup>。つまり、創造的行為がふるさとを生み、また人間らしさを回復させることにつながるのである。奇しくもこれは、観光まちづくりに関わる当事者の価値変容の過程をも言い当てているのではないだろうか。

「生命とは、存在している『物』ではなくて、燃えている『状態』であるということ、このことをまず認識しなければならない<sup>25)</sup>」というように、川喜田は、アクチュアリティに満ちた生命が循環する世界を認識の起点に据えた科学を希求していたのである。

このように、川喜田は「世界内的認識」に立ち、一人ひとりが主体性を発揮しうるボトムアップの参画型社会を構想し、「本物の民主主義」を創り出すことを目指したのであった。それは地域に根ざした観光教育においてもその基底に据えられるべき認識であり、方法論であろう。

宮本常一（1907-1981年）は1972年に発表された「過疎とへき地教育」と題する論考において、地方文化を高める社会教育ならびに博物館などの文化施設の役割を論じるうちに観光のあり方を問題にしている。

それぞれの土地で自分たちが安心して仕事ができるようにするために、いちばんたいせつなことは文化の問題です。ここで文化を温存させていくだけのものをわれわれが持つということなのです。そうすると観光ということもだいじになってくるのです。ところが、観光というのは、そのあり方が問題なのです。風景だけを見る観光もあります。しかし文化を

みていく観光もあるのです。(略)できるならば、自分たちの持っている文化なり資源なりが、われわれのいまの生活にどんな役割をはたしているかということ、自分たち自身だけでなく周囲の人にも発見してもらって、その価値について論じ合う場というものをつくりたいものです<sup>26)</sup>。

彼は、急激な経済成長とともに失われつつあった地域文化を資源とした文化交流としての観光を構想することによって、中央と地方や都市と農村、生産と消費の持続可能な関係に立脚した内発的な地域づくりを期待したのである。

宮本は、「これから先、われわれの環境の中にもっている資源が直接生産につながって、経済的な利潤をうんでくるだけでなく、文化的な価値としてこれから先、非常な意味をもってくるのが考えられます。それは、近い将来に人びとの持時間というものが質的に変化するからです」と指摘し、増加すると推定される自由時間は「遊びであり、スポーツであり、教養である時間となるはずです」と述べている<sup>27)</sup>。その意味で、彼が目指したのは、単に経済成長の手段としての商業主義的観光ではなく、余暇を通して観光交流と地方の文化振興をつなげ、自主性をもった人間を育成することであった。

「問題はへき地という意識をもつかもたないか、そこにへき地問題のただいな鍵があるように思うのです<sup>28)</sup>」と宮本は述べているが、この指摘には傾聴すべきものがある。彼にとって、へき地教育の要諦は風土の再認識による誇りの醸成であった。地域に根ざした観光教育も、こうした課題に対する現代的な一つの対応策といえるだろう。

井口貢は、日本民俗学や近現代日本文学の思想を公共文化政策の観点から読み解きつつ、地

域社会における観光のあり方や観光学の再考を促している。

マス・ツーリズムがもたらした弊害を克服するために、オールタナティブなツーリズムが求められて久しいが、このような時代背景であればこそ私たちは地域の所与のものとして存在する、しかし磨き方しだいではキラリと光る可能性をもった資源の価値を再確認して、これをブラッシュアップさせることで生きた観光対象としていかなければならない<sup>29)</sup>。

井口は、このような観光の捉え方を「常在観光」と呼んで、その本質と諸相について数々の著作を通して報告している<sup>30)</sup>。なかでも彼が目指するのは、「観光が有する地域社会への文化的波及効果<sup>31)</sup>」である。

「『地域の宝物』という言葉がしばしば使われるが、これを発見あるいは再発見・再確認することで、他の地域とは違う自己のまちの固有価値に対して誇りをもつことができるということ。そして、その誇りこそが新たな地域文化の内発的な創造や人材の育成のための原動力となっていくということ<sup>32)</sup>」を彼は繰り返し主張しているが、そのことは、まちに育てられた人々が協働によってまちを育てていく「協育としての観光<sup>33)</sup>」という考え方に端的に集約されているように思われる。

そしてそこにおいて、まちづくりは、「まちつむぎ」と捉え直され、「地域文化と地域経済の通時的な意味での固有性とその価値を尊重しながら、人びとのそれに対する受容能力を地域協育の力で高めながら、寄木細工ではない新たな地域(文化と経済)創造の芽を育成していくこと、すなわちつむいでいくことが求められる」と井

口は考えたのである<sup>34)</sup>。彼は、地域の文化と経済が調和した地域の内発的発展を常在観光あるいは協育としての観光を進めることによって、人々の生きる動機づけと、地域における公益性の実現に寄与することを目指しているのである。

以上に見てきた三人の思想は「ファスト風土化」に象徴される地方都市の文化的貧困状況を乗り越えていく方途として、その地域の風土を尊重した観光の重要性を示唆するもので、日常の営みに育まれる生活文化と観光の接点に学びの可能性を見いだすことができるといえる。

## おわりに

本稿ではコロナ禍後を見据えつつ観光の公共的役割に着目し、持続可能な観光の視点に基づいて「ファスト風土化」に抗する観光教育の意義について、若干の提起を試みてきた。

まず、ファスト風土化現象の傍らで、着実に育ってきたコミュニティの再生活動に目を向け、内発的発展論を土台に、スミス・石森・橋本の地域文化を射程に入れた観光研究をめぐる論点を見てきた。これらを通していえることは、地域文化の再生・創造に寄与しうるオルタナティブな観光では、地域社会の自律性支援が重要な論点となることで、地域に根ざした観光教育の必要性が明らかとなった。

そして、地域に根ざした観光教育は、地域固有の価値や人と自然・社会の関係性を追求して、風土の持続可能性を追求する関係性の学問であるとの認識を起点に、川喜田・宮本・井口の思想を参照して、「ファスト風土化」に抗する観光教育の意義について検討した。

こうした議論は、観光教育はライフデザイン教育でもあるとの認識に基づくものである。つまり、地域に根ざした観光教育は、学生はもち

ろん地域の人々に創造的な生き方を示唆するものと考えるが、その概念の捉え方や内実の探求については、具体的な実践事例の分析も含めてさらなる検討が必要である。

現時点の筆者の関心に引き寄せていえば、今後は、地域の文化遺産や伝統的な生活文化といった地域文化の継承と連携した観光交流の創出過程における地域住民にとっての学びの意義を検討することが重要な課題となる。

その際筆者が手がかりとしたいのは、地域住民と地域文化をめぐる三つの関係性である。すなわち1) 地域住民と地域文化、2) 地域住民と地域住民・市民、3) 地域住民と旅行者の関わりである。こうしたいわば文化的コモンズともいべき三つの関係性に着目しながら、それらもたらす学びの諸相を分析することで、地域に根ざした観光教育に接近できるのではないだろうか。この点は、今後の課題として受け止めておきたい。

## 注および引用文献

- 1) 遠藤竜馬 (2013) 「大学における観光教育のスタンダード化 - 「観光立国」を真に支える大学教育とは -」前田武彦編著『観光教育とは何か - 観光教育のスタンダード化 -』アビッツ、64-96頁。
- 2) 前田武彦編著 (2013) 『観光教育とは何か - 観光教育のスタンダード化 -』アビッツ、寺本潔・澤達大編著 (2016) 『観光教育への招待：社会科から地域人材育成まで』ミネルヴァ書房、橋本和也編 (2019) 『人をつなげる観光戦略：人づくり・地域づくりの理論と実践』ナカニシヤ出版。
- 3) 堀内史朗 (2020) 『観光による課題解決 - グローバリゼーションと人口減少による歪みを越える -』晃洋書房、山田良治 (2021) 『観光を科学する - 観光学批判 -』晃洋書房、井口貢 (2021) 『深掘り観光のススメ - 読書と旅のはざままで』ナカニシヤ出版、片山明久編著 (2021) 『旅行者と地域が創造する「ものがたり観光」：宇治・伏見観光のいまとこれから』ミネルヴァ書房等を参照。
- 4) 三浦展 (2004) 『ファスト風土化する日本 郊外化とその病理』洋泉社 (新書)、三浦展 (2006) 『脱ファ



- スト風土宣言 商店街を救え!』洋泉社(新書)。
- 5) 平田オリザ(2013)『新しい広場をつくる-市民芸術概論綱要』岩波書店、28頁。
  - 6) 宮台真司(2006)『制服少女たちの選択-After 10 Years』朝日新聞社(文庫)(原著、講談社1994年)。
  - 7) オギュスタン・ベルク×三浦展(2006)「ファスト風土の外にこそ多様な世界がある」三浦展『脱ファスト風土宣言』洋泉社(新書)、273-297頁。
  - 8) 同上、291頁。
  - 9) 鶴見和子・川田侃編(1989)『内発的発展論』東京大学出版会、鶴見和子(1996)『内発的発展論の展開』筑摩書房、宮本憲一(1989)『環境経済学』岩波書店、宮本憲一(2000)『日本社会の可能性-維持可能な社会へ-』岩波書店等を参照。
  - 10) 赤坂憲雄・鶴見和子(2015)『地域からつくる-内発的発展論と東北学』藤原書店、98頁。
  - 11) 同上、79頁。
  - 12) 同上、86頁。
  - 13) ヴァレン・L・スミス編、市野澤潤平・東賢太郎・橋本和也監訳(2018)『ホスト・アンド・ゲスト-観光人類学とはなにか』ミネルヴァ書房(原著1977年)。
  - 14) バーレンL.スミス/ウィリアムR.エディントン編、安村克己監訳(1996)『新たな観光のあり方-観光の発展の将来性と問題点』青山社(原著1992年)。
  - 15) 石森秀三(2001)「内発的観光開発と自律的観光」石森秀三他編『ヘリテージ・ツーリズムの総合的研究』(国立民族学博物館調査報告21)、5-19頁。
  - 16) 同上、11頁。
  - 17) 同上、11頁。
  - 18) 橋本和也(2018)『地域文化観光論 新たな観光学への展望』ナカニシヤ出版、18-38頁。
  - 19) 同上、78頁。
  - 20) 同上、229頁。
  - 21) 川喜田二郎(1993)『創造と伝統-人間の深奥と民主主義の根元を探る』祥伝社、38-39頁。以下、川喜田の思想に関する記述は、同書による。
  - 22) 同上、42頁。
  - 23) 同上、50-51頁。
  - 24) 同上、83-85頁。
  - 25) 同上、61頁。
  - 26) 宮本常一(1973)「過疎とへき地教育」『宮本常一著作集13 民衆の文化』未来社、225-226頁(初出、『峠みち』4・5、広島県へき地教育研究連盟1972年3月)
  - 27) 同上、226頁。
  - 28) 同上、209頁。
  - 29) 井口貢(2005)『まちづくり・観光と地域文化の創造』学文社、3頁。
  - 30) 井口貢編著(2002)『観光文化の振興と地域社会』ミネルヴァ書房、井口貢編著(2008)『観光学への扉』学芸出版社、井口貢編著(2011)『観光文化と地元学』古今書院等を参照。
  - 31) 井口貢(2005)『まちづくり・観光と地域文化の創造』学文社、14頁。
  - 32) 同上、14-15頁。
  - 33) 井口貢編著(2007)『まちづくりと共感、協育としての観光-地域に学ぶ文化政策』水曜社。
  - 34) 井口貢(2011)「協育とまちづむぎのために」井口貢編著『地域の自律的蘇生と文化政策の役割-教育から協育、「まちづくり」から「まちづむぎ」へ』学文社、193頁。

